
真夜中の魔女が待っている

柚木あづさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の魔女が待つている

【Zコード】

Z0742K

【作者名】

柚木あずさ

【あらすじ】

公園には魔女がいた。

静まり返った闇の中を駆ける。夜風にむらされた肌は痛いほどに冷え、今にも弾けそうなほど張りつめている。

民家の明かりもまばらな時刻。近道に利用している公園では蛍光灯がついに寿命を迎えていた。

闇に沈む公園でドーム状の遊具からは橙色の明かりが漏れていた。覗き込むと、ドームの中央に置かれた蝋燭を抱え込むように女性が横たわっている。温かくも頼りない光に包まれ、呑気な寝息を立てていた。

あいかわらず無防備な。

白いため息をつくと中へ入り込んだ。声をかけても女性は寝返りひとつ打たない。ポケットに突つこんでいた缶の一つをそっとあてがう。

「こんな所で寝てたら死ぬぞ」

「コンビニで大切に暖められていた缶だ。その熱量は侮れない。ぐいと押しつけると、女性はようやく瞼を押し上げた。

「お姫様は死なずに眠ってるもんだよ」

目覚めの一聲をはいはいと適当にいなされ、むくれながらも女性は起き上がる。缶を受け取り、まずはぬくもりを味わうかのように赤らんだ頬を擦りつけた。

「今夜は眠り姫か？ それとも白雪姫？」

「どっちもハズレ。私は魔女だから」

魔女。

それがこの女性の肩書きだ。それ以外のことは一切不明である。明かす気はないだろうし、聞く気もない。重要なのは来るかも分からぬアルバイターのために質素な茶会を開く酔狂な女である、といつ一点に及ぶる。

「さてさて本日は紅茶クッキー。茶葉を生地に混ぜて角切りリンクゴ

をアクセントに入れてくれました。おいしそよ、白雪君。ぜひとも慌てて食べておくれ

「ゆつくり味わうとするよ」「みる

渡された茶請けを頬張った。果肉がシャリッと砕けるたびにほのかな酸味が口内に広がる。今日は「ヒーヒーで正解だと呴けば、ヒーヒークツキーにすれば良かつたね」と意地悪い返しが待っていた。吹き込んだ風に、蠟燭の炎が揺れた。小さいながらも灯りには意地があるらしい。ドームの中に侵食してきた闇をしつかりと押し返していた。暖かくなつてきたとはいえたまだ冬だと身を縮こめる。

「お前や、この公園で寝泊まりしてるわけじゃないよな」

「今更だね。十夜一夜の仲なのに

「今更だね。十夜一夜の仲なのにひるむせえ、と軽く流すとぐぐもつた笑い声が小さなドームの中に響く。

「こんな夜更けに何してるんだよ

「王子様を待つてる」

口に含んでいた黒い液体が気管へと流れ込んだ。

「男連れて待つやつがいるか！」

「騙されてくれるほど鈍くはないか。まあ、お迎えを待つてるのは本当だよ」

魔女はすっと、ドームに開けられた穴の外を指さす。切り取られた夜空の中には、少し欠けた月がぼっかりと浮かんでいた。

「満月の夜に迎えが来る。明日のを逃しても不法滞在で強制退去させられるけど」

「……魔女の世界も世知辛いな

「ま、どこも似たようなもんよ。ホウキで飛べれば話は変わるけどあいにく無免許でね。お迎えを素直に受け入れないと

「今度はかぐや姫か。白雪姫になつたりシンデレラになつたり、魔女も忙しいようで」

「いづちでも有名人だけ、かぐや姫。公達の心を奪い去り、千年の時を超えて語り継がれる希代の魔女。私たちの憧れだよ

思わず向き直ると目線がかち合つた。魔女はにまりと笑んでいた。

明日はきっと雨だから。

魔女が別れ際につぶやいた言葉は呪文か何かだったのだろう。その言葉に従うように、今晚は細かい雨粒が降り注いでいた。

傘を差す必要があるのか分からぬかるんだ地面の上では夢見が悪い。きっと彼女は来ない。暖かい飲み物を用意するのも、今夜で終わりだ。

携帯電話を取り出す。残り十数分で日をまたぐ。日付が変われば魔法は解けるのだろう。いつも以上に冷たい風が魔法の残り香を奪い去っていく。見上げた空はどんどんよりと黒く泣いていた。

画面に視線を戻す。無機質に時刻を告げるデジタル時計は、吐息で次第に曇つていった。

ぬぐおうと指を動かしたその刹那。ぽんと背をたたかれた。

「携帯なんかじゃ良い夢は見れないよ

「……なら、これは悪夢か」

緩みそうになる顔面の筋肉を引き締める。毎夜蝋燭を手に待つていた魔女は、今宵はマッチの小さな灯火で夜闇を退けていた。

「来ないと思つてた」

魔女はうつむきくすりと笑つた。ビニール傘をくるくると回しながら、器用に一本目のマッチを点ける。ぽんと箱を投げ渡し、お前もやれ、と顎で催促してきた。明かりが増えると魔女は満足げに目を細める。

「良い夢見れそう?」

「最後はマッチ売りの少女か。やっぱ悪夢だな。つっかりしたら凍死体の出来上がりだ」

箱を返すと、すぐさまシュッと擦れる音がする。

「王子様としては失格だね。ロマンが無い」

返す言葉もなく炎のリレーを続けた。

お菓子ではなく、時間とマッチとを食いつぶす。茶会でもなんでもない。静けさが耳に痛かつた。残りは、一本。

ほぼ空の箱を振つてみせると、魔女は何かをつぶやきながら歩み出た。なでるような風に傘がふわりと飛び上がり、魔女の持つ炎が大きく揺れる。

反射的に炎を灯した。「これは夢ではない。幻でもない。魔女は確かにそこにいる。儂くも、おぼろげでもない。夜闇の中にくつきりと浮かぶ女性は柔軟な笑みを浮かべ、絡みつくような視線を投げかけている。

「時間だ　月が、満ちる」

魔女はゆっくりと空を指をした。つられて見上げると、雲間から光が差し込んでいた。

縁をうつすらと覗いてた月が徐々に姿を現していく。三日月、半月、小望月。すっぽりと覆われていた月がその全貌を見せたとき、手元でジュッヒ音がした。傘から垂れた水滴が、マッチの炎を喰らつたのだ。

魔法は十一時に消えるもの。魔女を名乗る女性は、煙のように失せてしまった。

視界の端にはビニール傘が転がっている。ずいぶんと安っぽいお姫様だ。人を失格者呼ばわりしたくせ、不死の妙薬もガラスの靴も残してはいかなかつた。泥のついた傘を拾い上げ、雲に沈んだ夜空を仰ぎ見る。

王子様になんかなつてやらないからな。

自嘲気味につぶやくと、ポケットに突っ込んだマッチがカラリと音を立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742k/>

真夜中の魔女が待っている

2010年10月8日14時35分発行